

企画展「どきを編む」に あの作家が…

企画展「どきを編む ～宮崎県の縄文土器～」を開催中の当館に、ある作家が来館された。宮崎県が主催し、様々な講演会やイベントが展開されている「神話のふるさと県民大学」で開催された講演会の講師として来県され、講演会終了後に西都原考古博物館を見たいと希望されたとのこと。

来館の数日前に、事務局の担当者から「ふるさと講演会の講師、三浦さんの方をお連れするかもしれません。」と連絡を受けてはいた。何となく気にはなったが、その時点ではピンと来ていなかった。

2月3日夕刻、来館された小柄な女性を見て、「やはりそうだ。」と思い当たった。直木賞作家の三浦しをんさんだ。『まほろ駅前多田便利軒』は映画化され、テレビドラマにもなっている。そして、本屋大賞の受賞作が『舟を編む』で、これも映画化されている。私はどちらも好きだ。それぞれ3回以上は観た。（原作は読んではいないが…）。特に『舟を編む』が好きだ。「辞書は言葉の海を渡る舟、編集者はその海を渡る舟を編んでいく。」というテーマは考古学に通じるものであると思った。

当館では、一年間の展示会の予定を決める時、学芸担当の全員からテーマ、趣旨、主な展示品などの企画案を提示してもらう。その中から特別展（県外資料も含めて構成する）、国際交流展（海外資料も含めて構成する）、企画展（主に県内資料で構成する）、コレクションギャラリー展（主に館蔵資料で構成する）と、相応しいものを選択する。その時点でどこまで構成が練られているか、既に借用資料の調査が進められているかなどの熟度と、なによりタイムリーな内容であるかを考慮しながら決定する。そして、最後に展示会のタイトルについても案を持ち寄り、内容を良く表すもの、語感の良いもの、なにより人を惹きつけるものをタイトルとする。

企画展「どきを編む ～宮崎県の縄文土器～」は、一万年以上も続いた縄文時代の始まりから終わりまでを、各時期毎の土器を中心に紹介するものである。

考古学研究者は、遺跡から出土する土器のかけらを見て、「今から何年前のものだ」と言い当てることができる。なぜなら、日常や儀式など人間生活の全般において使われてきた土器こそが、時代を示す「ものさし」であるからだ。

しかし、ひとつの土器を眺めても年代が書かれている訳ではない。特定の地域から出土する膨大な土器を比べ、製作技法を読み取り、省略や退化の度合いを調べ、分析し、分類し、年代順に並べていくのである。タテの並びだけでなく、同じ時期に使われた組合せ＝ヨコの関係も重要である。こうして、考古資料を「時代のものさし化」する作業を「編年」と呼ぶ。考古学の基礎である。

膨大な数が発掘されている宮崎県の縄文土器を取り上げ、その編年を辿り、時期毎の生活の様相を探ることをテーマとした今回の展示会。

「土器を編む（編年）」ことによって年代を探り、「時を編む」ことでその時期毎の人間生活の様相を探る。そこで、展示会タイトルを平仮名表記の「どきを編む」としたのだ。もちろん、『舟を編む』の言葉のインパクトが頭の中に巡っていたのは正直なところである。

三浦しをんさんに企画展の趣旨とタイトルの意味を説明し、展示室を案内した。多くの土器や石器に触れられ、土器を通して数千年前の縄文人と触れあう。この感動を体感していただけたと思っている。タイトルも気に入ってもらえた（と思いたい）。

(東 憲章)

